

आयूस: あーゆす

〈発行〉 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館／京都府宇治市模島町千足80

◆◆◆◆◆ 昭和四十六年七月 ◆◆◆◆◆

京都文教短期大学図書館長

幼児教育学科・教授（造形表現） 津田直樹

この夏、一通の手紙が舞い込んだ。差出人に記憶はない。差出人は私の住所が分からなかったらしく私の所属する美術団体からそれは転送されてきた。文面には、43年目に初めてお便りします、兄貴のようだった先生は43年前私たちの卒業と一緒に中学校を退職されましたとあり、学級委員のこと、演劇部のこと、次から次と思い出が一杯綴られている。そして、現在自分は国際線のパイロットであること、秋には日展を幼なじみの妻と一緒にきつと観に行くことと括ってあった。美術ファンの彼は私をインターネットで見つけたらしい。

昭和四十六年七月、私はソヴィエト船に乗ってヨーロッパを目指していた。私はその春まで横浜の中学校で5年間美術の教師をしていたが卒業式で生徒たちに、「平坦で、行く先の見えるアスファルトの道よりも僕は曲がりくねって何処へ行くか分からない地道の方が好きだ」と、訳の分からないことを言って退職して来たばかりだった。授業、部活、生活指導と三面六臂の忙しさは嬉しい充実感に満ちていたが絵を描くことを忘れていたのである。

このヨーロッパへの旅のルートは当時ソヴィエトが西側の旅人に開放したものであり、日本からナホトカ、シベリア鉄道でハバロフスク、そして国内機でモスクワ（2泊強制）経由でオーストリアのウィーンへ入るのである。ソヴィエトの米ドルがらみの策であったが私たち日本人にとっては安価であった。ソヴィエト国内機イリュージョンはよく落ちていたらしいが西側には伝わらない時代のことである。

小さな船は新潟から出航、突堤からは色とりどりのテープが飛び込み、旅人と見送り人を一瞬繋ぎ、ドラが鳴り、楽隊の演奏がブンチャカ始まる。私は静かな最上部の甲板で転がり込んだ失敗のテープの先にこれまた転がっていた空き缶をとりつけ地上に降ろし、パイナップルの缶に見送られて出た。あくる朝にはロシア大陸が現れて私はいそいそと昨日の甲板に上り早速スケッチを始めた。船上からの写真撮影は禁止であり違反者はネガ没収である。スケッチも駄目だろうか、私はこどもあろうに近づくナホトカの港を描いている、それも何枚も。甲板には私の他にいつ来たのか船員

が一人、煙草を吹かしてニヤニヤ笑っているが咎めるわけでもなくそのうち居なくなった。昼食もせずには私は眼前の港を描き続け、スケッチは10枚を超えていた。下船案内が聞こえる頃船員が今度は二人になっていて、やはり煙草を吹かして笑っていた。私がスケッチブックを片付け始めると彼等はおもむろに近づいてきてニヤニヤしながら手を出した。没収である。私は一抹の寂しさを感じたが諦めた。

写生ををすると言うことは目に見える姿形を写し取ることではない。画家は研ぎ澄まされた五感を駆使して繰り返し描くうちにそのものの命までも掴み取ることとなる。あの船員は知らない。画家が風と香りと音と一緒にたたき込んだ脳裏の風景を一瞬にして再生できることを。

シベリア鉄道は4人のコンパートメント。知らない者同士は気楽だ。車窓の風景を独り占めできる。早速10枚減ったスケッチブックを取り出した。とてつもなく広大な景色は大らかであり写生

の途中で食堂車へ行ってリンゴ酒とキャビア、黒パンとボルシチ、旅行者と歓談のあげくに部屋へ戻って来ても風景は変わらない。青い空、白樺の木立、緑の草原、銀色に光る一条の川、そして白い雲までがまだ其処にあり写生を続けられるのである。色を付けて一枚目を仕上げた頃二人の人影が近づいてきて手を出した。それは先ほど食堂車で会ったアメリカ人の夫婦であった。その絵が欲しい、いくらか。私は即座に断った。この夫婦は知らない。画家が写生を売らないことを。

魯迅の短編に、小さくて大きな出来事というのがある。それは魯迅が車夫との小さなやり取りのなかで大きな感銘を受ける話である。私の選んだ、曲がりくねって何処へ行くか分からない旅はこのような小さな出来事から始まった。

(つだ なおき)

「小さな出来事」 竹内好 訳
（『魯迅；茅盾』）／筑摩書房

大学の組織風土

京都文教大学図書館長

現代社会学科・教授（経営学・組織論） 渡 辺 峻

一般論ではあるが、「組織と個人」の「統合」の仕方については、「組織目標の達成」に軸足を置くのか、「個人動機の充足」に軸足を置くのか、基本的に大きく2つの異なる編制原理がある。前者はX理論モデル組織（他律人モデル組織）、後者はY理論モデル組織（自律人モデル組織）などと呼ばれているが、このような区分・識別は、組織論の世界では常識であり、経営学部の学生なら

一年生で学習することである。

X理論モデルの組織では、組織目標の達成を優先する集団主義・画一主義の体制を確立し、組織の鋳型枠に個人の側が合わせる運営がなされ、個々人の多様性・異質性は排除され、その動機・欲求の充足は無視・軽視される。ここでの個人は、組織への画一的忠誠・自己犠牲が要求される他律人モデルが前提にされており、中央集権主義のピラミッド型組織

のなかで、トップダウンの専制的な指示・命令のもとで外的強制により他律的に動かされる。そこでは出る杭は叩かれ、前例のないことは嫌悪される。

Y理論モデルの組織では、個々人の動機・欲求の充足を優先する個人主義・自由主義の風土が生まれ、個々人の多様性・異質性に組織の側が柔軟に合わせる運営が行われ、組織目標を達成する。ここで個人は、自覚・責任・自己管理が要求される自律人モデルが前提にされており、分権主義の逆ピラミッド型組織のなかで、個々人の多様な自己実現欲求を充足する行動が重視され、個々人は内面的に動機付けられて自律的に行動する。そこでは、出る杭は引き出され、多様性・異質性は前提にされる。

この2つのモデルは、いずれも「組織と個人」の「統合」ではあるが、その内容の原理はまったく異質である。これを大きな世界史的な流れの中で見ると、民主主義の思想と制度の深化・前進と

ともに、X理論モデルからY理論モデルの組織に移行しつつある。近年になりアメリカの陸軍ですら、組織強化・戦力強化のために、これまでの伝統的な上意下達のピラミッド型組織を棄て、最前線の一兵卒の自主的な判断を重視する逆ピラミッド型組織に移行している。日本でも、競争力の強い民間企業の場合は、ほとんどY理論モデルの組織を採用し、従業員満足・顧客満足を最優先している。研究教育機関の場合も同様であり、モチベーションの高い自律型人材を多数育成し、創造的な研究成果を多く出すような大学組織は、ほとんどY理論モデルである。

私学危機が深刻なレベルに進行した今日、もはや時間的な余裕はないかも知れぬが、本学における「組織と個人」の統合のあり方の「検討」が求められている、と痛感するのは筆者のみではあるまい。

(わたなべ たかし)

新聞小説を楽しむ

家政学科・教授 (応用栄養学・栄養教育) 坂本裕子

「さて、今年はなんのとしでしょうか」ではじまる文章に新聞で出会った。今年は「国民読書年」だそうだ。2008年6月の衆参両院で、「国民読書年に関する決議」が全会一致で採択されたそうである。皆さんはご存じでしたか。

読書。そう、もっと自由な時間があつたころ(自分のこと以外には責任というものを持たずに済んだころ、というところになるのか)は、なんて気ままに本を読んでいたのだろうかと思ひ出す。しかし、年を経るにつれだんだん忙しくなると、

必要な本は読んでも気ままにゆっくり本を楽しむということができなくなった。

そんな中、意外な楽しみを見つけた。それは、「新聞小説を読む」楽しさである。新聞小説はたいてい朝刊、夕刊にそれぞれ1つずつ掲載される。我が家の新聞は1紙であったり、2紙の時があつたり、あるいは週刊の新聞なども頼まれて取ったりしている。ここしばらくは日刊紙2紙と、週刊の新聞が2紙あるので、1日けっこう多くの小説に触れることになる。しかし、これはこ

れでなかなか忙しい。結局、読み出してみても面白そうだと感じるものを、気ままに読んでいます。

これが何か気持ちの奥まったところで、私の毎日に活気を与えている。毎日読まないとなんとなく気が落ち着かない。1日が終わった感じがしないのだ。それで、どうしても新聞が読めないときは、例えば出張などで留守にする時は、自宅に帰ってから回収された新聞を引っ張り出して、小説のところを読む。長い旅だと大変だが、読むとほっとし、ささやかながら満足して幸せな気分に入ることができる。とても小さなことであるが、日常には十分な幸せである。そして新聞を購入するのにこの小説の行方がとても重要な要素となり、最終回を待たないで、新しい新聞には移れないのである。

今、『悪人』（吉田修一作）が映画化され、よく宣伝されているのを見て、とても懐かしく思った。そもそも「悪人」は朝日新聞の連載小説であった。しかし、当時は作者、吉田修一がどんな人なのかは一切知らずに読んでいた。連載中は、ただただ面白いと思い毎日読んでいたが、それが映画化されたので、また改めて小説を思い出し、その思いを楽しんでいる。これまでいろいろな小説を新聞で読ませてもらったと思う。新聞で初めて作者を知り、彼らの小説の面白さを知った。しかし、これらは私が本屋で特に関心を示す作家ではなく、おそらく買わない本であったであろう。

過去に、筒井康隆の「朝のガスパール」（読者参加のメタフィクションであったが、私にはよく分からなかった）、渡辺淳一の「麻醉」、西村京太郎の「京都感情案内」、宮部みゆきの「理由」（直

木賞をのちに受賞）、服部真澄の「ダブル」、高樹のぶ子の「百年の預言」、あさのあつこの「グラウンドの空」（みずみずしい文章にとっても感心した）、島田雅彦の「徒然王子」、桐野夏生の「メタボラ」（現代のフリーター、ニート、偽装請負がわかり面白かった）などがあった。最近では、五木寛之の「親鸞」が非常に面白かった。そして、現在進行形の川上弘美の「七夜物語」もわくわくする。

新聞小説は読み切りではないため、一気に読み込むとか、面白さにのめり込むということには欠けるだろう。しかし、これまで読んだ新聞小説が意外によく記憶に残っていることが分かった。また、本屋に行ってもほとんど手に取ることがない作家達の作品を初めて読む機会となっていた。

現在、本はごまんとあり作家もたくさんいる。自分の人生で出合える本や作家はどんなに頑張ってもそう多くはない。そんな中、新聞小説は未知の世界を教えてくれる。自分で選ばない分、新しい選択となる。小説の中でいろいろな体験をしたり、人の心の動きや社会の様子を知ることができる。

情報社会である。インターネットでもネットサーフィンをすればいろいろな情報に出合えるが、新聞と違うところは、ネットで読む記事は、自分が、自分の意思が、自分の好みが、選択肢が全面に出ていくことだろう。新聞では“たまたま目についた”ということがよく起こる。それがまた楽しい。活字は乾いた心を潤してくれる。

（さかもと ひろこ）

❀❀❀❀❀ 私のすすめる3冊 ❀❀❀❀❀

幼児教育学科・准教授（日本文学） 千 古 利恵子

1. 『「社会調査」のウソーリサーチ・リテラシーのすすめ』

谷岡一郎 著／文藝春秋（文春新書）

現代人は多様なメディアが発信する情報の影響を受けながら暮らしています。その中には、お客さま満足度や人気ランキングなど、私たちを楽しませてくれる情報もあります。数値化された情報は説得力があり、その結果として、私たちから「疑いの目」を奪ってしまうように感じます。社会の至る所で実施されている調査のしくみについて少しでも知っておくと、数値データを読む面白さが増えます。何よりも、社会調査として発信されるデータに振り回されないことの大切さを教えてくれる本です。

2. 『^{おおづかみげんじものがたり}まる、ん？—大搦源氏物語』

小泉吉宏 著／幻冬舎

古典文学や歴史書離れがすすむと、「漫画でよむ…」という類の本が出版されるようです。古典文学の代表選手である『源氏物語』でも、よほどの愛好家でないかぎり五十四帖の通読は難しいでしょう。『ブッタとシッタカブッタ』の著者が、各帖を8コマ漫画で描いた本書は、『源氏物語』通読の準備には良いでしょう。決して美男子でない栗の顔をした「まる」が、光源氏として登場しています。タイトル「まる、ん？」は、当時自身のことを「まる」と呼んでいたことから付けられているのです。

3. 『頭がいい人、悪い人の話し方』

樋口裕一 著／PHP研究所（PHP新書）

「“バカ”と呼ばれないための知的実用書」という帯に惹かれて購入した本です。コミュニケーション能力の必要性が叫ばれる現代では、就職活動中の人に限らず「話す能力を高めなければならない」という思いから逃れられません。部下や異性から嫌われる話し方、人望が得られない話し方など、身近にある事例を示しながら「何気ない会話からその人の知性が分かるもの」ということを述べた内容です。「話すことはこわいこと」を再確認しながら、「知性とは何か」と考えさせられた本です。

（せんこ りえこ）

❁❁❁❁ 使わないと、将来フリーズします！ ❁❁❁❁

現代社会学科・准教授（経営組織論） 平塚 力

義務教育を終えた段階で「活字本を読んだことがない」という人は、日本人ならば稀でしょう。それでは学生の皆さん、活字本は読めますか？

そもそも、なぜ本は読めなければならないのでしょうか。知識や情報を得ることも答えの一つですが、それに関しては皆さんも理解しているでしょうから、違った観点から考えてみましょう。

脳神経外科の築山節氏は、その著書『フリーズする脳』の中で、脳の機能が低下し思考（認識や判断）に影響が及んだ状態を「脳のフリーズ」と定義し、将来ボケを誘発する要因の一つにあげています。例えば、調べものがある場合、インターネットのキーワード検索だけで情報を引き出すことが習慣化されると、脳のフリーズが助長されるようで、以下のメカニズムを指摘しています。

脳に負荷をかけた分、脳神経のネットワークが発達し、その結果として脳の機能が維持されます。しかるにキーワードさえ入力すれば勝手に情報を集めてくれるという状況では個人が努力して発見する、計画して見つけ出す、覚えるという体験（負荷）が失われます。つまり自分が楽をして情報を引き出すということは、脳にも楽をさせているわけですから、使わない筋肉がおちていくように脳の機能も低下し、結果、脳のフリーズが生じます。このほか同書では、努力して獲得した知識は、しなかった場合に比べて、長期的に保持されることも紹介されています。「本が読める」という状態へ

ともっていく作業（努力）は、知識の獲得と脳の健康維持、双方においてメリットがありそうです。

ところで、「本を読むこと」と「本が読めること」とは違います。本を一冊読み終えたとしても、そこから何の情報や知識を引き出せないのならば、それは活字を眺めていたに過ぎません。それでは「本が読めた」とは、どういう状態なのでしょう。その答えは、それぞれのゼミの指導教員に聞いてください。それでは、どうすれば本が読めるようになるのでしょうか。方法は二通りです。

一つは本を読むこと、つまり経験を積むことです。しかし本を読むスキルが未熟なのに、本を読み続けることは苦痛以外のなにものでもありません。もう一つは、本の読み方を学ぶことです。何事にも、原理、原則、ルールがあり、本（活字化された文章）とはどういうもので、どういうルールに則って成り立っているのかが分かれば自ずと読めるようになります。つまり本を読むにもノウハウやスキルが必要なのです。逆説的ですが、know-how of readingに関する本を読破できれば、本は読めるようになります。ただし独りでは困難だという人は、初年次のゼミや文献購読科目を活用してください。本の読み方を学ぶこと、それは大学生としての第一歩です。

季節は秋、読書を通して脳の健康管理に取り組んでみてはいかがでしょうか。

（ひらつか つとむ）

*****「選書ツアー」感想*****

臨床心理学科1回生 田中 皓大

私が選書ツアーに参加した理由は、図書館でアルバイトをしていた時に、司書の方から「参加人数が余っているので参加しませんか？」というお誘いを受けたからだ。勿論、一回生なので選書ツアーに参加したこともなく、どのようなものなのかわからなくて悩んだ。説明を受けると、自分の欲しい本（漫画や趣味性の強いものを除く）を大学のお金で買い、図書館においてもらえる、という事だった。読みたかった本や、興味があるけど、買えなかった本を買えるとは、なんて良い企画なのだろう。昨年のツアーで購入された本を見てみると、色々な本があるから、趣味性云々の審査も案外緩そうだし、気楽に行こう。と思わずに参加を申し込んだ。

当日、時間はお昼過ぎから夜八時までであれば、自分の都合の合う好きな時間でいい、という事なので、私は五限目の授業があるため、移動時間を含め、参加は七時から一時間にした。前は本を結構読んでいたし、一時間もあれば本も沢山選ぶ事が出来るだろう。そう思って挑んだ。書店に着くと、一人のノルマは三万円程度、と言われた。

思っていたよりも高額なノルマに驚きながらも、数ある本の中から自分が興味のある本や、他の人に読んでもらいたい本、なおかつ図書館に相応しい（趣味性の強すぎない）本を持っていたカゴに入れながら、店内をゆっくり回って行った。今までは買いたい本があったら書店に向いていた。だから買う本はあらかじめ決まっていた、その本を買えば終わりだった。しかし、今回のように、広い店舗を隅々までじっくりと色々なコーナーの本を見て回るのは初めてで、とても楽しめた。

そうこうしているうちに、時計は八時前を示していた。手元のカゴの中にはノルマの半分に届くかも怪しい位の量しか入っていなかった。既に図書館に無い本や、他の人と被らない本を探すのがこんなに時間がかかるとは思ってもいなかった。もし、また選書ツアーに参加する機会があれば、今回の失敗を活かし、じっくりと本を選ぶ時間を確保して行きたいと思った。

最後に、選書ツアーで選ばれた本はどれも面白そうな本が多いので、ぜひ借りて読んでみてください。

(たなか こうた)

***** 選書ツアーで出会った本 *****

健康生活デザイン専攻2回生 岡田 玲奈

私は今回、選書ツアーというものに参加し、自分の興味のある本をたくさん選ぶことができた。

その中で、『20代にしておきたい17のこと』という本が目についた。20代を目前とする自分に

とって興味深い題名でもあった。

この本は、著者「本田健さん」の考えや、実際に「経済的にも社会的にも成功して、今幸せな人たち」に聞いたもの、30代より上のあらゆる世代の人たちに、「後悔していることは何か」をインタビューしたもの、いまの人生が順調にいったらよかった」と思うことが書かれた本である。この本を読んでいくうちに、これからの人生の中で色んな事に挑戦し、もっと前向きに考えようと思うようになった。そこで、いくつかその事柄について、紹介したいと思う。

まず、1つ目は「自分で積極的にチャンスを作る」事だ。成功している人は、若い頃からチャンスに対する感度がとても高く、誰に言われなくても、チャンスを生かす準備をしているようだ。ただ待っているだけでは、やりがいのある仕事も、成功への足がかりも向こうからやってこない。チャンスをつかめる人は普段から地道な努力をし、チャンスが来た時、すぐに前に飛び出せるようにしているようだ。このことから、情報を自ら発信することで、チャンスを作り、チャンスをつかむ事が出来るのだと思った。何か目標を達成しようと思った時、少しのチャンスが目標に繋がるのだと思う。また、成功している人、していない人にかかわらず、チャンスをつかむ事は自分の成長になると感じる事ができた。これから少しでもチャンスがあれば挑戦し、成長していきたい。

2つ目は、「両親と和解」することだ。両親と和解できないと、人生で安心感を持つことができなくなる。ルーツを失っているようなもので、ど

こか殺伐とした気持ちで生きなくてはいけなくなるようだ。心理学では、父親と和解できていると、キャリアを積んだり、人生で、さあ何かをやらうと言う時に、感情的な抵抗力が少なくなる。母親と和解できていると、今の自分を受け入れることが楽になる。創造性を育んだり、人生を味わう、楽しむ事が自然にできるようになるそうだ。しかし、心の中で両親と和解できないという人はたくさんいるようだ。また、仕事ばかりに人生を費やしてしまう人は、母親と解けあっていない可能性があり、仕事の方向性がわからない、お金がなかなか入ってこないという人は、父親と解けあっていない可能性があるようだ。両親はいつまでも元気でいてくれるわけではなく、たいてい自分よりも先に亡くなってしまう。10代は両親に反抗する事もたくさんあると思うが20代になって両親と和解できていない人は自分のためにも両親のためにも和解する努力が必要だと感じた。来年から、私も社会人として働いていくので両親に少しでも親孝行をして行きたいと思った。

他にも、「20代にしておきたいこと」がたくさん書かれている。ぜひ、この本を読んでこれからの自分の人生のヒントとして読んでもらいたい1冊である。

(おかだ れな)

『20代にしておきたい17のこと』

本田健 著／大和書房

